



はじめに——こんな時代だからこそ、楽しく所得倍増計画を

とても大切なことを、最初に書いておきます。

この本は、おもしろい。笑って読んでいるうちに、「稼ぐ」「身を滅ぼさない」ということの本質と具体的方法がきっちり理解できる。

いや、そういうことだけではありません。もっと大事なことがあります。

人はみな誰かの役に立ちたい、困っている人を助けたい、という心根を少し、または、そこそこ持っています。

しかし実際のところ、まずは自分の安全を確保しなければ、人を助けられません。せいぜい小銭を出して自己満足するか、同情して見せるか。日本は古くから助け合いの国だったのに、いつの間にか「見て見ぬふり」をする人々が増殖してしまったのですね。落語の人情噺は、自分を顧みず赤の他人を助けることに自然です——ときどき

度が過ぎるほど。

未曾有といわれる世界的不況を脱出してゆくには、人を雇う人が増える、もちろん、あなたも、私も——この小さな繰り返ししか処方はありません。

雇用を増やせ！ リストラをやめよ！ 賃上げしろ！

ぜひ、お訊きしたい。この国はいつから、人を一所懸命になって雇う人たちが、蔑まれるようにすらなってしまったのか、と。

明らかに、戦後の変節期の暴走ゆえです。

ひどい経営者もいるでしょう。しかし、基本は、人が人をたくさん雇うこと。

これが経済を立て直す唯一の処方箋です。

文句をいう前に、まずあなたが人を雇ってみましようよ。

できますか？ やらねばならないのです、一定割合の人々が、必ず。

ところで私は、ハワイで人命救助をしたことがありました。

ハワイの小さなホテルに籠って、プールサイドで分厚い専門書を熱心に読んでいる

のが私。プールサイドでは他にカナダ人の50歳位の男性が読書をしており、その娘（22歳位）がプールで潜水をしていました。

プールの中および周辺にいたのは、私を含めてこの3人だけです。

私がかたまたま分厚い書物から眼を離れたとき、「何かへんだな」という、得体の知れない小さな違和感を抱きました。

何だろう。

25メートルのプールに、たったひとりの女性が潜水を続けていた。

慣れていたのでしょうね。何度も何度も繰り返してやっていましたから。

読書の眼を休め、そうすると当然プール周辺に視線が行きます。

何だろう、このへんな感じは。

22歳の女性が、プールの底で動かなくなっていたのでした。そこに視線が固定されるまで1〜2秒はかかったと思います。

即座に相手の父親に声をかけ、「冷静になり、そこで待機してくれ」と言い、私が

飛び込んで彼女の首の下に手を入れて水上に出し、父親に手を借りてプールサイドに横たえ、私が人工呼吸をし——生まれて初めて——もうダメかと思いかけたとき、私は彼女と自分自身に対して「諦めちゃダメだ！」と大きな声を発し、ようやくガボツと水が出て、臨死状態だった22歳は息を吹き返してくれました。

1時間ほど部屋で疲れを癒いしたようですが、元気に部屋から出てきて、まだプールサイドにいた私に「ハイイ！」と手を振って、それで終わり。

ご両親も、ニコニコしながら手を振ってくれました。

助けるとは、そういうことではないのかと私は思いました。その終わり方は、まるで何事もなかったかのように、が理想なのではないか——。

なぜこんなことを（当時）深く考えたかという点、たまたま、まったく同じ時期（2001年1月26日）に東京の新大久保駅で、泥酔でいすいした男性がプラットフォームから線路に転落し、日本人と韓国人が勇敢にも助けに飛び降り、結果3人とも電車に轢ひかれて亡くなった、という鉄道事故があり、このふたりが英雄としてマスコミで大々的に礼賛らいざんされていたからです。

私は、死んだらダメだ、と思いました。そんな英雄があるものか、とも。

私はその果敢さを称えることは否定しません。でも、日本列島と韓国全体が美談として称え合うことに、大きな違和感を抱いてしまったのです。

自分の安全を確認（最低でも万一の時の避難場所を確認）せず、泥酔した他人を助けようとするのは、あまりにも無謀だったのではないか。こういう「人助けの失敗」を、深く考えぬまま美談にしてはいけない。私は当時、「英雄に対する美談」ばかりが溢れるなかで、<sup>あ</sup>敢えて孤軍、敵陣百万人ともいえども我行かんの心持ちで、そのように新聞の時評や雑誌のコラムに執筆しました。

あれからずいぶん時間が経ちます。

経済が悪化するなかで、「人を助ける」とはどういうことか、どうすればできるのかと自問自答し続け、やはり人を助けるためには「自分に安全とゆとり」がない限りは非常に難しいと、多くの事例を分析するなかで、ますます確信するようになりました。

自分の生活を犠牲にして、義父母の介護を自宅でやるのが普通の農村を回った時も、同じことを強く感じます。

私たちの多くは、「人の役に立ちたい」「困っている人を何とかしてあげたい」と心の中では思いながらも、実際には何もできない場合が圧倒的だからこそ、新大久保駅転落事件で亡くなられた二人を称えたのでしよう。

もし（転落した泥酔者を含めて）3人も亡くならずに、無事プラットフォームに救いあげられていたらどうでしょう。

私が、ハワイのプールで女性を助けたことと、まったく同じことになった——つまり報道すらされず、日常の一コマとして、命を助けられたご本人すらケロツとして「ハワイの話」が出た時に、もしかしたら思い出すかどうか、くらいだったはずですよ。人を助けるというのは、そういうふうにあるべきではないか。

失敗してニュースになっても、人を助けたことにはならない、と私は思うのです。

私自身の稼ぎが充分でなかったときにも、亡くなった友人の遺族（お子さんの学費）の仕送りを続けてきました。

もちろん「出世返しね」とか「自分なら、そうしてほしいから」という、遺族が受け取りやすい状況を自分なりに作って。

自己満足かもしれません。しかし、そのためにお子さんたち全員が大学にも行けたことは間違いありません。今は亡き同業者は、どうしてもやり遂げたいルポの取材費をつくるため、亡くなる前に生保を解約してしまっていたのでした。

日本人は、お金のことを避けすぎている。大切なものの一つだという認識すらない——ようにふるまいながら、本当に困った事態に陥った人を見捨ててしまう。これは表裏一体なのではないか、と私は思うようになりました。

原稿料や印税のことを口にするのはハシタナイという構えをとる作家ほど、裏に回ればお金の愚痴ばかり、というのは日常茶飯事です。この偽善者め（笑）。

今の時代に限らず、いつ何が起きるか分からない——。いかなる事態が起きても対処していけることと、自分の安全を確保しつつ、本当の意味で他人を助けることは同



じはずです。

私は今年2010年の夏から、「クレド」特別会員というシステムをつくって、充分に「時間とお金とエネルギーにゆとりをもつ人になる」ために、最初の年は可処分所得の増加を最低15万円（最高は1500万円、それ以上できてしまえば会員になる必要はありません）、翌年はその2倍、翌々年は3倍、解散する5年後には5倍（最低でも240万円、最高では2億4000万円のポケットマネー）を増やしてゆく仕組みを、数百人で行っています。

やり始めたら、たった1週間で目標を達成する人が続出してしまいました。

日本国全体では8割の働き手が収入を減らしているのです。この「クレド」特別会員だけは、8割以上が収入を増やす集団になります。挑戦です。実に壮大な試みなのですよ、実際。

自分で朝、自然に起きられる人はいい。本も読まずに小説を書き始められる人は、それでいいでしょう。蠟燭ろうそくに火をとますが如く簡単にホテルを建てられる人は建てたらいいのです。

けれども、先人の智恵は何百何千もあるのですから、それらを学び、自分流にアレンジしてゆくのが我々にとって一番の近道であり、確実な王道です。借りられる智恵は、何でも借りましょう。すべてを一から発明する必要もないし、そんな天才は一世紀にひとりもいれば充分です。

最初の15万円や30万円くらいは、おそらく何とかなるでしょう。

いや、給料しか貰ったことがない人や公務員（公務員ですら正当な副業収入の道が条文で定められています）には、ちよいと難しいかもしれません。

でも、リストラにあったら、どうなるのか。民間でのボーナスカットなど、いとも簡単になされる時代です。同級生に愚痴ったら、「貰えるだけマシじゃないか」と言われてしまう時代になってしまいました。

他方で人間というもの、「この家庭を守りたい」とか「あれを實現しないと夢見が悪い」などと追い込まれば、とりわけその立ち直りやガンバリの過程で「大勢の顧客」がいると、ごく普通の人たちが、とんでもない力を出してしまう——というのも

また事実です。

それを「クレド」特別会員という制度に結実させつつあります。

さらに――。

15万円を上乗せするのと、240万円を上乗せするのでは、次元が違ってきます。でも、徐々に慣れることが肝心です。稼ぎ方を、学校も親もろくに教えていないのですから。本書の特別付録の「カジノ教育」をバカにするのも結構。しかし、では、あなたは、どうやって次世代の子どもたちに「お金」の教育を実践的にやっているのですか？

千里の道も一歩からです。

給料を貰い続けるか、ホームレスになるか、再び実家の世話になるかの三者択一しかない処方では、何も考えていないのと同じです。

自立とは言えません。

サラリーマンも、フリーランサーも、経営者も、会計と経営、そして法律の知識や

ポイントは絶対に知っておいたほうがいい。いや、知らねば必ず崩壊のときが来る。

そろそろ、不況を他人や業界や政府や経営者の「せい」にするのは、やめませんか。先行きが見えないこの時代に、やるべき処方は、たった一つだけです。

いかなる事態が来ようとも、自立し続けられる、可能なら身近で最も困っている人を自然に助けられること。これしか、ありません。

もとより本書は、「クレド」特別会員について書かれた本ではありませんので、詳しくは私の公式サイト「ガツキファイター」のトップページ「所得倍増計画」をクリックして、ご覧ください。運が良ければ、すぐに入会することができますかもしれない。もうすぐ定員に達するので、1年は待機していただくことになるかもしれないが、ご容赦を。

苦勞して長時間労働に身と心を捧げる時代は、もう終わりにしましょう。

22歳と同じことを62歳でできますか？

大人には、長く生きてきたというだけで、たくさんのお恵みがあるのです。楽しく、

ラクをして、充分に稼ぐ。若いころよりよく遊び、ときどき、長あい休みをとって存分にリラックスもする。

そういう人になるための、日本で最も実践的で、わかりやすい本——を作りました。ぜひ、行動に移してみてください。

毎年20%ずつ低下したら、たった3年で収入は半分になるのですよ。  
あなたは、半減と、倍増の、どちらを選びますか？

日垣 隆